いいたて イノサル通信 ③

飯舘村のニホンザル

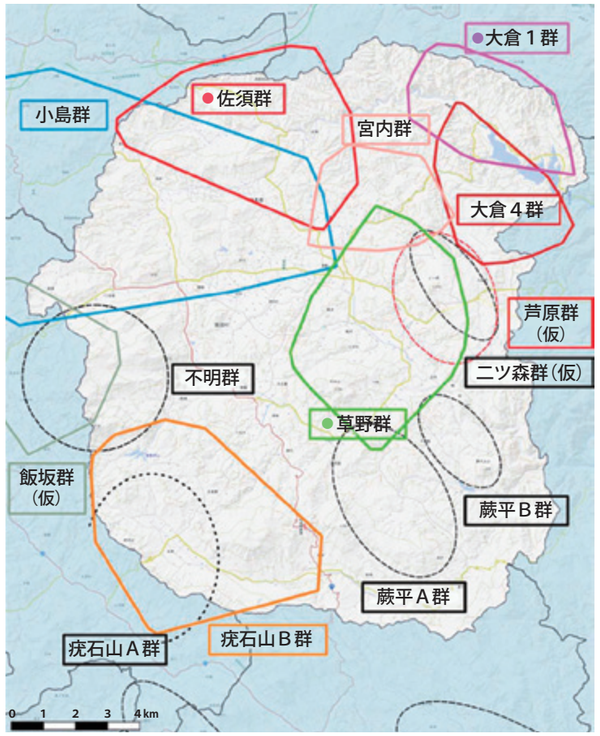
野生動物がどこに何頭いるのかを調べることは、とても難しいことですが、ニホンザルの場合、少し違います。群れで生活するため、その中の1頭に電波を発信する機器をつけることで、群れがどこで活動しているかを調査することができます。また、昼に活動するため、群れの電波を追い、何頭いるかを数えることができます。今回は、そういった調査により分かったことを紹介します。

飯舘村では村全体にニホンザルの群れがいて、その数は12群781頭とされています（令和5年度飯舘村ニホンザル管理事業実施計画より）。また、群れが農業や生活環境に及ぼす被害の程度を加害レベルと言いますが、●草野群、●大倉1群、●佐須群（地図参照）は、比較的加害レベルが高いとされています。

ですが、まだ調査をできていない群れ、不十分な群れがあり、今後も調査を進める必要があります。調査により群れの特徴を知ることで、効果的な対策を実施することができます。

〈 飯舘村のニホンザル分布図 〉

福島県環境保全農業課：令和4年度調査報告書より



地図の見方：群れ名と同じ色の実線が、その群れが行動する範囲です。点線の群れは、調査が十分でなく、推定の範囲です。

ニホンザルの豆知識

- 北海道や離島を除き、日本の樹林に広く分布。
- 日本固有種で、サルの仲間では最も北に生息。
- 雑食性で、果実や葉などの植物質を多く食べる。
- 昼間に十数頭から百数十頭までの群れで行動。
- 出産は２,３年に１頭だが、農作物など栄養のあるものを食べていると毎年出産する場合もある。
- 垂直、水平方向に約２m跳躍できる。
- 鼻や耳ではなく、目で食べ物を探す。
- 人の食べ物を好み、ほぼなんでも食べる。

イノサル通信は村の鳥獣対策を支援する鉄谷さんからのお知らせです。

福島県避難地域鳥獣対策支援員

鉄谷（てつや） 龍之（たつゆき） さん

平成31年4月から同支援員。令和３年から飯舘村の鳥獣対策に携わり、今年度から村の主担当。専門は野生動物管理・鳥獣被害防除。

歴史の散歩道

草野舘（くさのたて）跡

「草野」の呼び名の由来から

戦国時代、飯舘村一円は『草野郷（くさのごう）』と呼ばれていました。この呼び名は、綿津見神社の当初の社名『苕野（くさの）神社』に由来すると言われています。〈綿津見神社由来碑〉には「水と木の恵みをもたらす神を苕野の神と呼んで祀り、大同2年（807年）に地名を草野と定めた（※一部を要約）」と刻まれています。

そして月日は流れ、相馬家の当主・相馬高胤（たかたね）が、草野郷に『草野舘』を築いたのは文明年間（1469～87年）と伝わります。「舘（館）」というのは武士の住居で、城や砦の役割を持っていました。

相馬氏の命を受け草野舘の城代となった増尾阿波守（あわのかみ）貞清は、以降「草野氏」を名乗り、三代にわたってこの地を治めました。草野郷は、相馬氏と伊達氏が領土を争う境界にあり、相馬氏は要衝の備えとして、草野舘にはその後も有力家臣を置きました。

草野舘は元々あった丘を利用して築かれた山城です。草野舘の北西部には西舘があり、2つの間は空堀で区画されていました。現地には今もその面影が残っています。

戦国時代真っ只中の天正17年（1589年）には、相馬氏と伊達氏の合戦が現在の飯樋地区で勃発。相馬家の当主、相馬盛胤（もりたね）・義胤（よしたね）親子も草野郷に入り、陣頭指揮を取って領地を奪い返したと伝わります。激戦となった飯樋地区には古戦場跡が残ります。時勢の流れによりこの時の合戦が、伊達氏との境界争いにおける最終戦となりました。

草野舘は台地の東端に築かれました。この北西にある西舘との間を区切った空堀の跡も残ります。

現在企業共同体仮設事務所の駐車場内にあります。

かつて小学校が置かれた南山腹に由来を記した碑があります。碑の後ろの道は西舘跡へ続きます。

ふれ愛館だより

交流センター「ふれ愛館」からのお知らせです。

「わくわく農業体験塾」開始!!

今年度も「わくわく農業体験塾」が始まりました。6月3日に、第1回実行委員会を開催し、キュウリやトマト、ナスなどの夏野菜を中心に定植。6月13日にはセロリの種蒔き、スイカの定植など。昨年度とはまた違った環境で挑戦しています。

今後の活動日時については、交流センター「ふれ愛館」入口のホワイトボードにて周知しています。まだまだ塾生を募集中です。楽しくおいしく活動していきますのでぜひご参加ください。